

中野重治全集

第二十六卷

筑摩書房

中野重治全集第二十六卷

一九七八年二月二十五日初版第一刷発行

著者 中野重治

発行者 岡山猛

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号 一〇一—一九
電話 〇三例七六五一(代表)
振替 東京六—四—一二三
印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

装釘 柄折久美子

第二十六卷 目次

あけびの花

一

塵勞鈔

三七

後記

著者うしろ書 風俗変遷の五十年

三八

解題

三九

あけびの花

酒屋にいて書く

本所松井町

海

不敵の面魂

鬼子母神そばの家の人

禁酒記

医者の話

私信

山猫その他

嘘とまことと半々に

昔の大学校

家賃の問題

一友人のこと

A B Cの友の愚談

四 元 六 四 三 五 三 二 六 三 二 八 六 三

わが交友

ほこりつばい春

女三人

スポーツ雑感

子供と花

郊外散歩

自分ひとりのための広告雑誌

僕のラジオ

医者とりアリズム

わが生活記

広告と製本

ユーモアということ

随筆厭悪

ずり

遺伝

汽車二題

兎

三

至

弄

弄

六

六

六

六

六

七

七

七

七

八

八

蟹シャボテンの花

沢掬の紗那

家その他

紋どころ

読者のふえ方

頭のなか

グーテンベルク

誠実ということ

昔のものについて

ものの名づけ

できそうできぬこと

身辺雑記

工場の思い出

わが家の美術品

才能と努力

建物の間隔

九

一〇二

一〇九

一一三

一二四

一二六

一二八

一三二

一三四

一三六

一三八

一三四

一三九

一四三

一四七

一五二

風景の変遷

菓子屋と本屋

先生の息子

残りの年齢

北陸の村にて

わが家の子供の育て方

家庭だけのあたたかさ

柿のうまい食い方

たばこのあき箱

わらべうた

日本的な笑い

金沢の食いもの

たのしく美しく

時の条件

結核のこと

へちま くちなし えぞすみれ

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

萩のもんかきや

二〇一

美術というのとは少しちがうもの

二〇四

文章の題

二〇五

紫の判子

二〇六

木の名、鳥の名

二〇八

福井中学としての記憶

二一一

越前丸岡の霞ヶ城

二一三

螢光燈

二一六

野菜づくり

二一九

高野長英のはしご段

二二〇

二人の数学教師

二二三

二人の留学生

二二六

さかさまの感じ

二二八

原稿ガラ

二三〇

平泉 金色堂 中尊寺

二三三

GUDDO DEZAIN

二三〇

日本海の美しさ

二四二

トルストイの家とゴーリキー博物館

二四六

庭と畑

二四八

江漢と雪鼎

二五〇

あるヒキガエルの死

二五三

今日ただいまのところ

二五五

目方のかからぬ紙

二五八

わがエセ哲学

二六〇

旧盆すぎの奥能登

二六三

人まえて食いものを食うのは悪いことなのか

二七〇

私と色

二七二

今と昔

二七四

ふる里を思う

二七七

無骨なやさしさ

二八〇

一枚の小さなピサロ

二八四

私の故郷

二八六

郵便と郵便局

二九一

「ほろずつばい」話

二九四

遠野瞥見

二九七

あけびの花

三〇三

脱けたところ脱けているところ

三〇五

すこし昔の、ある在所のこと

三〇九

冬の北陸・山陰

三一三

襖紙のこと

三一四

塵労鈔

短歌 一

三一九

短歌 二

三一九

口笛の話

三二〇

短歌 三

三二六

貧乏と寒さにふるえながら

三二六

国旗

三二八

編集後に

塵勞鈔

ひとり言

無題

姉の話

またしても

六月

絵のことなど

泊り

短歌
四

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

あけびの花

酒屋にいて書く

一

僕は一個の古朝鮮の人形を持つている。ほかに何か手ばなすものがあるとしても、こればかりは手ばなしたくない。蠟石で刻んであつて、頭が大きく、耳なぞは、右と左と、大きさも違えば位置も違う。顔面だけがたんに磨いてある。おりおり僕はそのなめらかな頬に手をふれる。また手のひらに載せてまわしながら、刻々に変化するその陰翳いんえいをたのしむ。人中にんちゆうの深いその唇は、ときにはほのかに笑いをおび、ときには悲しげに慄おそえている。そして切れの長い眼は常に半眼にしてゐる。僕はこの人はきつと音楽を聴きいてゐるのだと思う。でなければ、ただここにこうして坐まつてゐるのに違ちがひない。そして居ねむりをしてゐるのかも知れない。この人は、居ねむりをしてゐるときにさえ口辺くちべんにかすかな微笑をたたえてゐるそういう人だ。「我心悠悠わがこころゆうゆう 駕言出遊くるましてわいであそび 以写我もつてわがうれいを憂のぞ」のぞというような言葉はこういう口から洩れてくるのであらう。この人になりたいする僕の心持ちはほとんど情痴とも言えるくらいだ。いつの日か僕は、この人にもつゝる僕の心を一篇の詩に歌いたい。この人になりたいする僕の愛はすでに妹にもわらわれた。僕は僕の死後これを誰に譲らうかと心配になることさえもあるのである。

二

君たちのうちに、自分の見た夢を書きつけている人があるか。また君たちのうちに、自分の見た夢を書きつけ

た人、あるいは書きつけている人を知っているものがあるか。もしもないならば、そういう欲望を感じ、その欲望を一九二三年このかた実行にうつしているめずらしい男として僕を認めてくれたまえ。

すべての少年はかつてある一つの不思議な世界を見ただろう。そして彼は考えただろう。

——これはいつたい何だろう。

——これは夢というものだろうか。

——夢というものがある。

——そうだ、これが夢なのだ。ふむ！と。

このときの夢、この夢をいまだに覚えているものが君たちのうちにあるか。またこの夢を覚えていた人、覚えている人の名を聞いたことのある人がいるか。もしもないならば、僕がそれを覚えていることを、僕の数すくない誇りのうちの一つに数え入れることを僕に許してくれたまえ。

僕は一生のうちにどれだけのおもしろい仕事もできないかも知れない。また僕は臆病なためにどれだけのおもしろい振舞いを見せることができないかも知れない。けれども僕はたいいていの人に劣らずよく夢を見る。僕は、文字どおりのごく卑近な意味における 'Trainer' としてのみようやく人なみでもあるのだろう。それに夢のなかでなら……いや夢のなかでもやはり、僕はいつも臆病であり、おろかな猿知恵を振りまわしている。せめて夢のなかでなら……そんなはかないことも思われるのである。

これは遺言のようなもので、したがって冗談みたいにも聞こえるのだが、彼そもそものいかなる夢を見たか、などということが何かの拍子に思い出されて、もしも君たちが僕のこの夢の日記を読んでくれる時があるならば、ここに今僕が書いてきたこの文字を、その序として見てもらいたい。それを年来の誼^{よしみ}として僕は君たちに願いたいのだ。

三

世のなかというものはまあなんというおもしろいものだろう、と僕は思うのだ。
おもしろい話でもあるかね。

だれか僕にきく人がいたら、話してやろうと思つてゐるそのおもしろい話が僕には三つも四つもあるのだ。

あるとき美術学校へ用があつて行つたら、つんぽのおじいさんがいて、手のひらを耳のとこへ当ててかぶりを振つて、それでもつて彼がつんぽであることを示した話や、また別のとき美術学校へ用があつて行つて門番のおじいさんに時刻を聞いたたら、彼は目の前にかけてある時計を自分で眺めながら即答ができなかつた話や、そしてそれも道理だ、その掛時計はさかさまにかかつてゐたのだ。しかもそれを僕に見つけられて、その白髪しろがみのおじいさんが娘のようににはにかんだものだという話や、僕が二月二十八日の午ひるすぎ税金を納めに行つたら、きょうは午前十一時半で締め切つたが特別に三月二日（一日は日曜だつた）の日付けで預つておきますと言われて、だからそんな特例もあるものだという話や、親も家も女房も金もなんにもない（しかし戸籍はある！）僕の友人が、僕に向かつて、天才の顔いろはいずれの民族にも属しない、おまえの顔いろはその顔いろだ、そしておれのもまた、と言つた話や。

それにしてもこの世のなかというやつはまあ何とした悲しいところだろう。